

クラウドコンピューティングの発達を背景に、学術活動を支援する過程で、研究成果や評価情報を蓄積する国際的プラットフォームが形成されつつある。

情報は集積することで、それ自体の持つ価値を高めることができる。この情報の性質が、今、研究成果の情報の集積と分析の競争を引き起こしている。しかしながら、日本は英語を共通言語とする研究プラットフォーム構築競争の中では全く主導権をとれていない。世界の研究状況が、海外プラットフォーム事業者にはリアルタイムで可視化され、日本の研究者には部分的にしか見えないという状況は、日本の科学の進展にとって重大なハンディキャップとなるだけでなく、安全保障上の問題にもなりうる。

同時に、ネットワーク化が科学の在り方そのものに大きな影響を与えつつあることにも注目すべきである。研究者をつなぐソーシャルネットワーク、市井の研究者もネットワークを介して参画しながら知を発展させるオープンサイエンス、科学的方法論の姿を変えつつあるビッグデータサイエンスなどの動きから日本は落伍してはいけない。

日本はこれまで個別の研究に注目し、大きな資金を投じてきたが、学術電子化の基盤的なプラットフォーム（デジタルライブラリー、デジタルアーカイブ、電子ジャーナル）やそれを運営する人間の技能に対しては十分な注意を払ってこなかった。その状況を改めるべきである。多言語化やマルチメディア化などで、智のプラットフォームが進化する余地はまだ数多く残っており、これからでも的確な手をうつことでプレゼンスを高めることが可能である。

● クラウド上のプラットフォームに全ての研究成果の情報が蓄積される時代

研究者、論文、所属機関などの情報が、IDによって、大手商業出版社やIT企業などが提供するプラットフォーム上で可視化、蓄積されている。例えば、大手商業出版社であるElsevier社（オランダ本社）やThomson Reuters社（アメリカ本社）は、抄録・引用文献の巨大なデータベースのサービスを提供している。

● プラットフォームの主導権を握れない日本

商業出版社以外にも、研究者を対象としたSNS（例えばResearchGate）をはじめ多様なプラットフォームが登場している。しかし、いずれも英語圏を主体とするものであり、日本はその構築において遅れをとっている。さらに、プラットフォーム間での覇者を巡る競争の熾烈化は、電子ジャーナルプラットフォーム覇者に、世界の研究動向の情報が独占されることを意味し、早急な対応が必要だ。

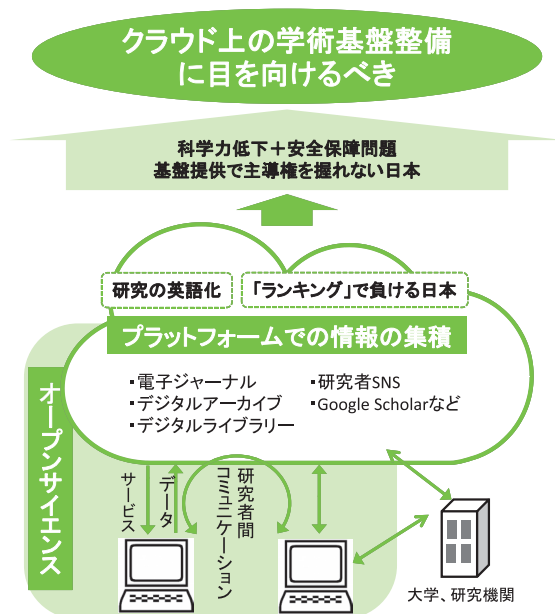
● 核となりうる図書館・デジタルアーカイブ

オープンアクセス—無料で入手可能な論文のデータベース構築—の動きは、電子ジャーナルの高い契約価格に悩む大学図書館の解決策になっていない。大学図書館は、大きな変化に翻弄される研究者へ本来の研究・教育の場を提供するべきである。同時に、EUのヨーロッパナなどのデジタルライブラリーのように、公共機関が文化資産を電子化し、それを幅広く活用させるためのオープンアクセスの核となるべきだろう。

● 情報革命で科学の形が変わりつつある

市民が収集した鳥類の観測データを使った研究が実施され、独立研究者も生まれている。また、研究成果の評価に、ソーシャルメディアでの反響も取り入れようという試みも起きている。他方、プラットフォーム上で集積された引用論文数が世界の大学ランキングに如実に反映され、大学も順位を無視できない状況となっており、これは研究者の研究姿勢にも影響を与えている。もっとも、研究のグローバル化が進む中、ローカルな日本語圏ならではの研究を探る戦略も一考に値する。

図1 クラウド上のプラットフォームに研究成果の情報が蓄積される時代



研究会委員	國領 二郎	慶應義塾大学総合政策学部教授／慶應義塾常任理事（座長）
	生貝 直人	東京大学附属図書館新図書館計画推進室・大学院情報学環特任講師
	市古みどり	慶應義塾大学日吉メディアセンター事務長
	小野塚 亮	慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員
	倉田 敬子	慶應義塾大学文学部教授
	小松 正	小松研究事務所代表／多摩大学情報社会学研究所客員准教授
	林 和弘	科学技術・学術政策研究所センター長補佐・上席研究官
	神田 玲子	理事／研究調査部長
	羽木 千晴	研究調査部研究コーディネーター・アシスタント
N I R A		



PDFはこちらから